

小田原城とその城下

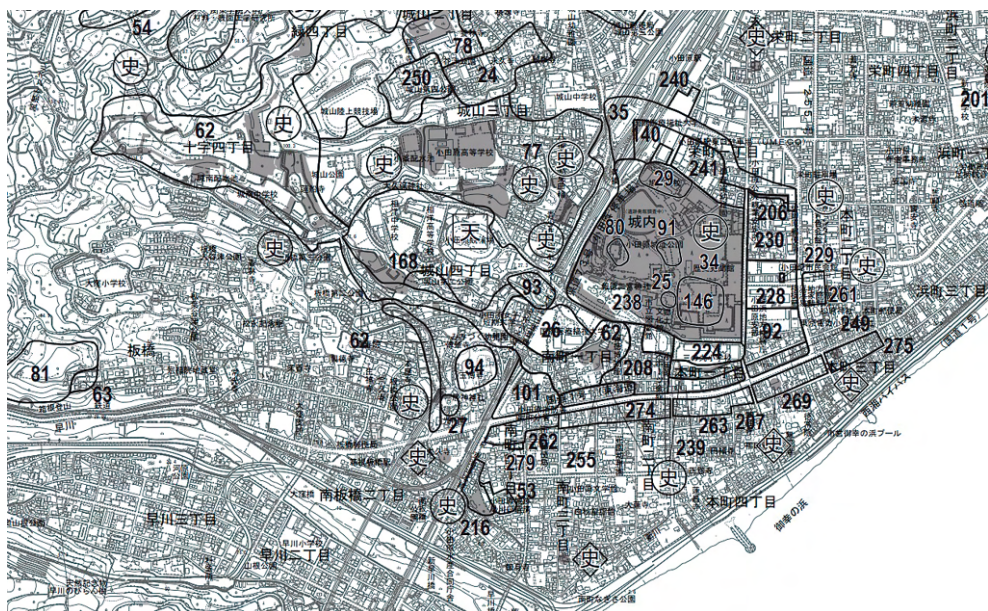
—街道沿いのくらし—



小田原市教育委員会

例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」第18号として作成しました。
- 2 今号では「小田原城とその城下」のうち、江戸時代に宿場町となる東海道沿いに立地する遺跡を紹介しています。なお、第19号では江戸時代の小田原城三の丸に立地する遺跡、第20号では小田原城の本丸・二の丸の遺跡を紹介する予定です。第15号の「総構」と合わせ、小田原城周辺の遺跡の参考にご利用下さい。
- 3 本書で扱う遺跡は、下の遺跡分布図の内、No27・53・94・101・239・249・255・262・263・269・274・275・279遺跡です。
- 4 本書の刊行は令和4年度国庫補助事業である「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として行いました。
- 5 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同） 相原俊夫、白政晶子、株式会社 玉川文化財研究所、神奈川県立歴史博物館、横浜開港資料館、小田原市立中央図書館、小田原城総合管理事務所
- 6 本書の作成は、小田原市文化財課三戸芽が担当者となり、同課大島慎一・土屋健作・土屋了介・加藤夏姫・早野路子・市毛秀人・小林竜一の協力を得ました。



第1図 小田原城とその城下の遺跡地図

- [表 紙] 幕末の小田原宿 (F.ベアト撮影)
 欄干橋町・筋違橋町付近の町並み (横浜開港資料館所蔵)
- [裏表紙] 小田原城下欄干橋町遺跡X地点ほか出土 銭貨

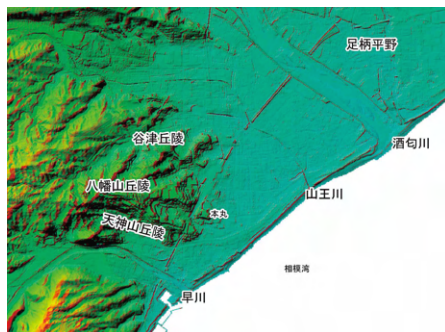
I 小田原城下周辺の成り立ち

1 小田原城周辺の立地と環境

小田原城は、箱根外輪山から東に延びる丘陵先端部に位置し、南西に早川、北東に山王川・酒匂川が流れ、南東は相模湾に面しています。

その城域は自然地形を巧みに利用して設定されており、標高123.8mの^{こみねおかねのだい}小峯御鐘ノ台を頂点とした^{やつ}谷津丘陵・^{はちまんやま}八幡山丘陵・^{てんじんやま}天神山丘陵の三本の尾根とその麓に広がる標高10m前後の沖積低地で構成されています。

現在、小田原城天守閣が建っているのは、八幡山丘陵先端部です。



第2図 小田原城周辺の地形
(国土地理院地図より作成)



写真1 北東からみた小田原城とその城下

2 発掘調査のあゆみ

小田原城とその周辺では、これまでに多くの地点で発掘調査が行われています。最初の本格的な発掘調査は、昭和46年(1971)の本丸・二の丸で行われたトレンチ調査で、鉄門では階段状遺構や石組水路、石垣の角石などが確認できました(写真2)。

そして、昭和52年(1977)の鍛冶曲輪北堀の調査で初めて戦国時代の障子堀を確認し(写真3)、戦国時代の小田原城の姿が確認されました。

1980年代からは、小田原城本丸・二の丸の国指定史跡地以外でも開発行為に伴う発掘調査が行われるようになり、昭和61年(1986)に行われた箱根口跡第Ⅱ地点の調査では、江戸時代の絵図にはない堀が3本検出されるなど、現在知られる小田原城とは異なる姿の時代があったことが明らかになりました。

その後、発掘調査件数の増加に伴い、多くの情報が蓄積されたことで埋蔵文化財包蔵地(遺跡)の範囲も把握され、1990年代には近世三の丸の範囲がほぼ遺跡となり、2000年以降は東海道筋にも遺跡が拡大したことで、小田原城下・小田原宿でくらしただいけいようの人々の様子が明らかになってきました。

なお、小田原城周辺で確認されている最も古い遺跡は旧石器時代の遺跡で、八幡山古郭本曲輪第Ⅰ地点では約35,000年前の箱根畑宿産黒曜石でつくられた「台形様石器」と呼ばれるナイフ形石器が出土しています(写真4)。

この他、愛宕山遺跡第Ⅱ地点で約23,000年前の「有樋尖頭器」、総構の位置にある谷津山神遺跡第Ⅱ地点では約18,000年前の礫器が15点出土しており、御用米曲輪でも石核が出土しました。

これまでに見つかった旧石器時代の遺跡は散発的なものですが、続く縄文時代

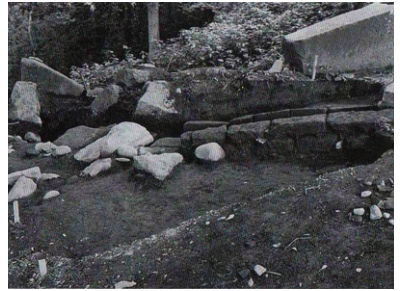


写真2 鉄門跡近くでみつかった石組水路

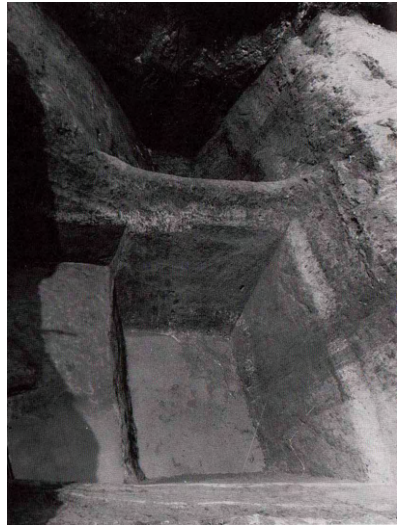


写真3 鍛冶曲輪北堀でみつかった障子堀



写真4 八幡山古郭本曲輪第Ⅰ地点出土の石器



写真5 縄文時代前期の遺物出土状況

になると様々な遺跡が確認されています。

小田原城三の丸新堀第ⅩⅢ地点では、縄文時代前期前半の黒浜式期の土器片を含む遺物包含層が見つかり（写真5）、小田原城二の丸住吉堀では縄文時代中期の漆塗木製容器が出土しています。

この他、天神山丘陵に位置する天神山遺跡では、縄文時代後期の敷石住居跡や土坑墓おくみながやが見つかり（写真6）、天神山丘陵裾部の御組長屋遺跡では縄文時代後期の住居跡が確認されています。



写真6 天神山遺跡第Ⅲ地点

弥生時代の遺跡としては、天神山遺跡で後期の住居跡が確認されており、かんのうじあと感応寺跡第Ⅰ地点や本町遺跡第Ⅷ地点でも弥生時代の土器が出土しています。

古墳時代の古墳も天神山丘陵に位置する御組長屋遺跡で確認されており、天神山丘陵には多くの原始・古代の遺跡が展開しているようです。天神山丘陵上の遺跡については、小田原の遺跡探訪シリーズ9『天神山周辺の原始・古代の遺跡』で紹介していますので、詳しくはそちらをご参照下さい。

また、小田原城下本町遺跡第Ⅲ地点やはんこうしゅうせいかんあと藩校集成館跡、べざいてんあと弁財天跡第Ⅴ地点などで、古墳時代後期から平安時代の住居跡や溝などが見つかっています。これらの原始・古代の遺跡の多くは、戦国時代以降の遺跡により削られてしまっているところが多いですが、小田原城が築かれる以前の歴史を語ってくれる重要な遺跡と言えるでしょう。

そして、本書で中心的に取り上げるのが戦国時代・江戸時代の遺跡です。

ご存じの通り、小田原は城下町であり、東海道の宿場町でありました。しかし、戦国時代と江戸時代の小田原の様子は大きく異なっており、まったく別のものと言っても過言ではありません。本書ではその特徴を紹介していきます。

Ⅱ 戦国時代のくらし

1 遺跡からわかる職人のくらし

中世以降、小田原城周辺で遺跡が確認できるのは、今のところ14世紀に入ってからです。文献史料でも「をたはら（小田原）」の地名が登場するのは14世紀に入ってからなので（称名寺文書「某書状」）、この頃より今に繋がる都市小田原の歴史が始まったと考えることができます。そしてこれ以降、小田原城周辺では様々な人々のくらしの痕跡が確認できるようになります。

戦国時代になると、後の小田原城下西縁部となる板橋や南町（御組長屋遺跡・山角町遺跡）で、職人の活動を示すような特徴的な遺構・遺物が見つかっています。

山角町遺跡第Ⅳ地点の調査では、集石遺構から未成品を含む134点の石製品が出土しました（写真7）。石製品には、挽き臼類・石塔類・石製容器などの未成品のほか、材料と考えられる多くの円礫、石を加工した時に出る破材も出土しています。また、既製の大型石塔を再加工している様子も確認され、この場所が石材加工を行う場所であり、材料を集積しておく場所であったことがわかりました。



写真7 加工途中の石製品がみつかった山角町遺跡第Ⅳ地点の集石遺構



写真8 御組長屋遺跡出土の石塔未成品



写真9 欄干橋町遺跡第Ⅶ地点出土の鍛造剥片

実は、山角町遺跡第Ⅳ地点とは国道1号を挟んで北側に位置し、1990年代に発掘調査が行われていた御組長屋遺跡第Ⅰ～Ⅳ地点でも石製品の未成品が出土していました(写真8)。しかし、この時の調査では遺跡の明確な時期を確認することはできませんでした。それが山角町遺跡第Ⅳ地点の調査により、16世紀前半以前のものであることが確認されたため、周辺地域の歴史の一端を明らかにすることができました。

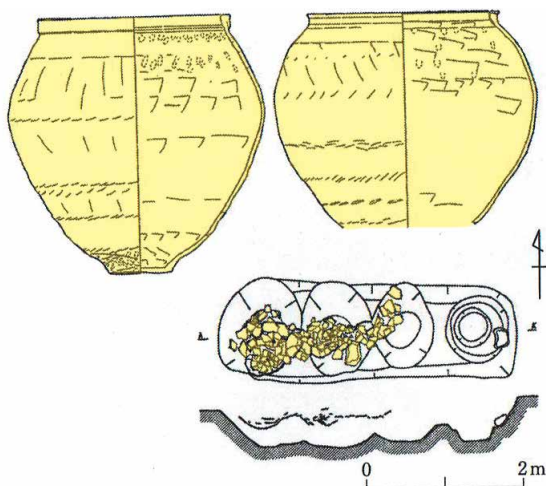
板橋(大窪)には、戦国大名北条氏の下で石切棟梁を務めた善左衛門ぜんざえもんがいました。江戸時代に記された「由緒書覚」によると、善左衛門は戦国時代に御組長屋に移住し、小田原合戦後に板橋に居住したとあります。善左衛門の優れた石材加工技術は徳川家康にも認められ、江戸にも屋敷・石置場を与えられました。ここで見つかった遺跡は、善左衛門をはじめとする石材加工技術者=職人の活動を示す遺跡と考えることができます。

そして、欄干橋町遺跡第Ⅶ地点では、鉄滓てっさいや鍛造剥片たんぞうはくぺんなど鍛冶に関連する遺物が出土しています(写真9)。鉄滓は第ⅩⅧ地点でもまとまって出土しており、欄干橋町では鍛冶職人が活動していた様子が垣間見えます。

また、欄干橋町遺跡第Ⅳ地点は、500年以上の歴史を伝える薬種商外郎家ういろうの所在地です。外郎家は、北条氏により京都から招かれ、江戸時代には小田原宿の宿老を務めた名家です。京都だけでなく、中国大陸との繋がりも強く、中国産天目碗や朝鮮産の碗が出土しています(写真10)。遺構としても、小田原用水(早川上水)に関連すると考えられる石組水路などが検出されるなど、小田原城下の様相を考える上で大きな成果が得られました。



写真10 中国産天目碗



第3図 御組長屋遺跡の常滑焼大甕

この他、御組長屋遺跡では、4つの常滑焼大甕が並んで埋め置かれた遺構が検出されています（第3図）。複数の大甕が並んで出土している様子から、この遺構は藍染めなどに用いた甕倉の跡ではないかと考えられます。

文献資料からは、御組長屋遺跡に隣接する大窪（板橋）に京紺屋津田藤兵衛が居たことがわかります。文献史料の記載を含めて考えると、この遺構は津田藤兵衛などの藍染め職人の活動を伝えるものと評価できるかもしれません。

他にも小田原城下では、漆を塗る際のパレットや漆の濾し殻なども出土しています。これらは漆職人の活動を示す遺物です。

まだまだ断片的ではありますが、小田原城下では多くの職人が活動し、賑わっていた様子がうかがえます。しかし、これらは散在的に分布しており、戦国時代には身分や職業の違いによる住み分けなどは行われていなかったと考えられます。

2 様々な「やきもの」

15世紀になると、大量生産・大量消費の時代を迎えます。それまでは、木器や漆器などが多く用いられてきました。陶磁器の使用は限定的でしたが、瀬戸・美濃窯（愛知県・岐阜県）などで「大窯」と呼ばれる大きな窯がつくられ、大量生産が行われるようになると、これらの製品は各地に運ばれて消費されていきました。

小田原でも瀬戸・美濃窯製品が多く出土していることから、日用品としての利用頻

度が高まったものと考えられます。

そのような中でも、中国で生産された陶磁器は貴重なものでした。戦国時代、中国にも近い西日本や日本海側では一定量の中国産陶磁器が出土していますが、小田原が位置する関東地方では中国産陶磁器の出土量は多くはありません。遺跡からの出土土器・陶磁器全体の数%程度という状況がほとんどで、貴重な「やきもの」であったことがわかります。

しかし、小田原では中国産陶磁器は22.7%の出土比率を示しており、関東地方の中では大きな比率を占めています。これは、小田原城下がモノの集まる集散地として栄えていた様子を示していると言えます。北条氏はこのように貴重な中国産陶磁器を贈答品として用いながら、領国支配・外交交渉を行っていました。

これまでのところ、小田原城下で戦国時代の陶磁器がまとまって出土したという事例は少ないですが、寛永10年（1633）の寛永小田原大地震後の廃棄土坑である欄干橋町遺跡第Ⅵ地点の53号土坑からは、陶磁器がまとまって出土しています（写真11）。この中には中国産陶磁器も多く含まれており、戦国時代まで遡るものも含まれています。小田原合戦（1590）では、小田原城では大きな戦いは行われていないため、寛永小田原大地震までは戦国時代と変わらない生活が続いていたと考えられます。貴重な中国産陶磁器も、大切に使われ続けていたのでしょう。



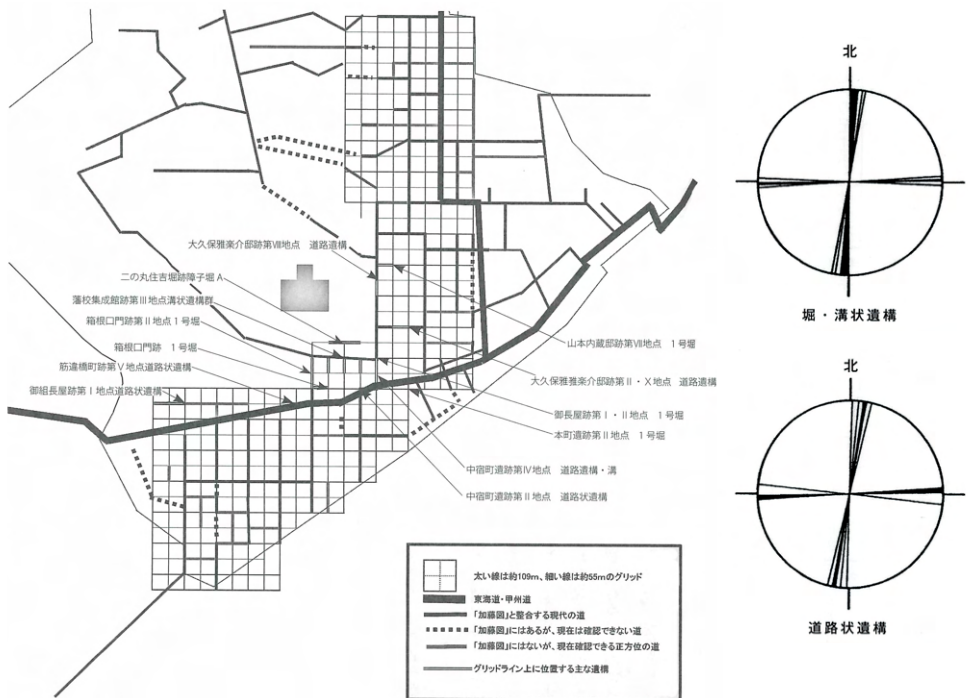
写真11 欄干橋町遺跡第Ⅵ地点53号土坑出土遺物

3 遺構から見た戦国都市 小田原

天文20年（1551）に小田原を訪れた南禅寺の僧 ^{とうれい ち おう} 東嶺智旺の記述を収める『明叔 ^{みんしゆく} 録』には、府中小田原の町は整然と塵一つない小路が整い、東南には町の麓まで海が広がっていると記されています。このことを示すように、これまでの発掘調査成果を分析すると、戦国時代小田原の景観は『洛中洛外図』に描かれた京都のように、正方位に区画された町割であったと考えられます（第4図）。

町割の痕跡を示す遺構は、道路状遺構や堀・溝などです。小田原城周辺で見つかったこれらの遺構の分析結果が、第4図の円グラフです。ほぼ全ての遺構が、正方位から10度以下の同じ軸線に向いていることがわかります。

確認されている道路状遺構は、場所によって幅や側溝・路盤の造り方は様々です。
^{すじかいばしちょう} 筋違橋町遺跡第Ⅴ地点で見つかった道路状遺構は、路盤が50cm程の厚さがあり、砂利や砂などを互層に重ねた丈夫な造りであったため、寛永小田原大地震後に改修される前の東海道ではないかと想定されています（写真12）。



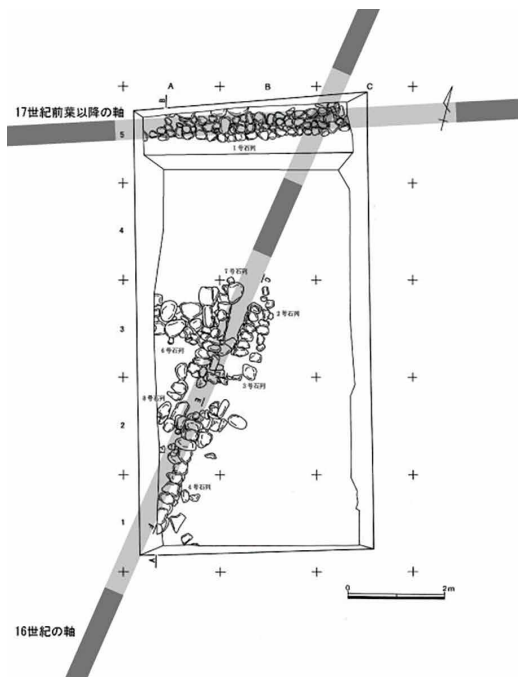
第4図 16世紀の小田原模式図と遺構軸（佐々木2019bより転載）



写真12 筋違橋町遺跡第Ⅴ地点の道路状遺構

なかじくちょう
中宿町遺跡第Ⅱ地点では、17世紀中葉を境に、遺構の軸が正方位から25～30度傾く様子が確認されています（第5図）。このことから、小田原城下・小田原宿の町割は、寛永小田原大地震を境に、戦国時代以来の正方位の町割から、傾いた軸線へと変更になったものと考えられます。

このような軸線の傾きは、本町や中宿町、筋違橋町などに顕著に見られます。そのため、町割の改変は東海道筋で行われたものと考えられます。その一方で、西海子小路などの国道1号南側の地域などには、現在も正方位の町割が残ります。発掘調査の分析から、さいかちこうじ正方位の町割は戦国時代以来のもので



第5図 中宿町遺跡第Ⅱ地点の遺構軸
(佐々木2023より転載)



写真13 本町遺跡第Ⅲ地点の堀

ある可能性が高いため、寛永小田原大地震後の改修は限定的であったとも指摘できます。そのような視点で小田原の町を散策してみると、実は今でも戦国時代の面影に触れることができるのです。

このような発掘調査成果は、結果的に本章冒頭で触れた『明叔録』の記載とも一致し、考古資料・文献史料双方から、戦国時代の小田原の様子を証明することとなったのです。

そして、戦国時代の小田原には、このような正方位の区画の中に堀に囲まれた武家屋敷も存在したようです。^{ほんちよう}本町遺跡第Ⅲ地点では、16世紀前半に構築されたと推定される大規模な堀が確認されています（写真13）。堀幅は14m近くになると推測されており、堀障子を備えた障子堀です。低地部に構築された堀としては大規模なものですが、見つかった場所が国道1号（東海道）より南側であるため、小田原城の堀とは考えられません。同様の堀は、本町遺跡第Ⅷ地点などでも見つかっています。

文献史料では、北条氏照^{うじてる}の屋敷が堀に囲まれていることを示すものがあります。そのため、このような堀は城下に所在した武家屋敷の堀であった可能性が指摘できます。

正方位に区画されていた戦国時代の小田原ですが、遺構の分布状況からは地域ごとの特徴が垣間見えている場所もあります。その代表例が、^{ほうけいたてあなじょう}方形堅穴状遺構の分布です。

方形堅穴状遺構とは、地面を方形に掘り下げた遺構で（写真14）、壁面に石を積ん

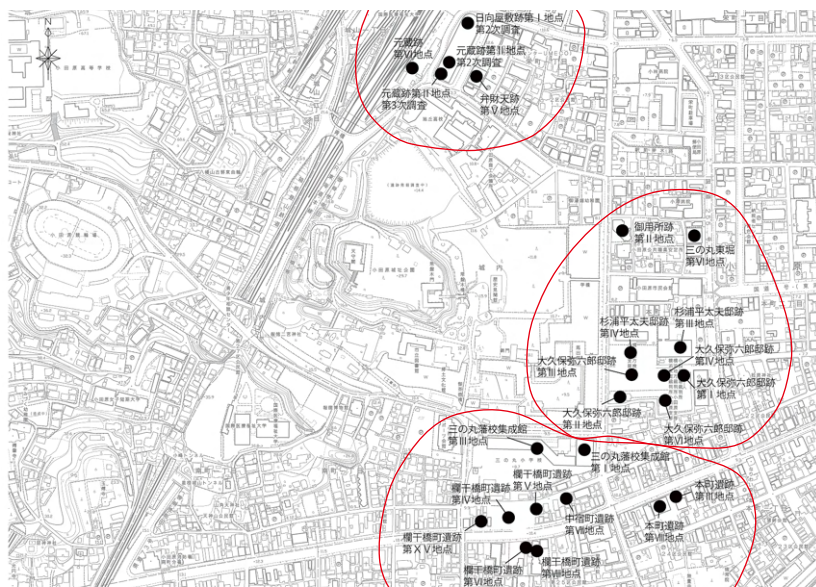
だもの、床を張った痕跡のあるもの、
 床で火を焚いているものなど、様々
 なものが確認されています。半地下
 式の建物の跡と考えられており、倉
 庫などの貯蔵施設として使われたと
 いう説が有力です。



写真14 欄干橋町遺跡第Ⅵ地点の方形竪穴状遺構

小田原城周辺の方形竪穴状遺構の
 分布を見ると、概ね三つの地区に集
 中し、八幡山から延びる丘陵上に位
 置する元蔵跡・弁財天跡周辺、三の丸東側の大久保弥六郎邸跡・杉浦平太夫邸跡周辺、
 旧東海道に面した欄干橋町遺跡周辺に集中しています（第6図）。いずれも比較的地
 山のしっかりした場所であるため、方形竪穴状遺構のような構築物が造りやすい場所
 であったと見ることもできますが、倉庫だとすると、そのような倉庫を用いるような
 人々の存在を示す遺構と言えるかもしれません。

まだまだ不明確な戦国時代の小田原ですが、このような特徴的な遺構の分布が発掘
 調査で確認され、それを頼りに少しずつ考える材料が増えてきています。



第6図 方形竪穴状遺構の分布

Ⅲ 江戸時代のくらし

1 東海道屈指の宿場町、小田原宿の賑わい

江戸時代になり、江戸日本橋を起点に街道が整備されると、小田原は箱根の山越えを西に控え、多くの大名・旅人が宿泊する宿場町として繁栄しました。

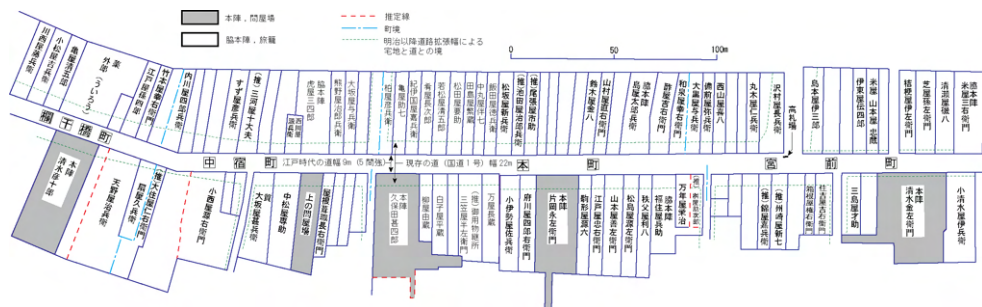
小田原宿の中心は東海道に面した「通り町」で、西側から山角町・筋違橋町・欄干橋町・中宿町・本町・宮前町・高梨町・万町・新宿町の九町がおかれ、「脇町」として東海道から分岐する甲州道沿いに青物町・一丁田町・台宿町・大工・須藤町・竹花町、「通り町」と平行する茶畑町・代官町・千度小路・古新宿町の計十九町で構成されていました（第8図）。その範囲は、東側の江戸口（山王口）から西側の上方口（板橋口）までの東西二十町六間（約2.2km）、南北九町五間（約0.9km）です。

本書表紙や写真15として掲載したイギリス人写真家F.ベアト撮影の写真をみると、小田原宿には二階建ての建物が並び、屋根は瓦葺きではなく、板屋根を割竹でおさえる「小田原葺」が採用されている様子が見られます。小田原宿は、瓦屋根が推奨された江戸の町とはひと味違った風情をかもし出していたようです。



写真15 幕末の小田原宿（「THE TOWN OF ODAWARA」F.ベアト撮影）

本町から中宿町付近の町並み（横浜開港資料館所蔵）



第7図 19世紀中ごろの小田原宿中心部の町割（『小田原市史』を元に着色）

また、元禄4年（1691）オランダ商館長随伴の医師として江戸参府途中のドイツ人ケンペルは、次のように小田原宿の第一印象を『江戸参府旅行日記』に記しています。

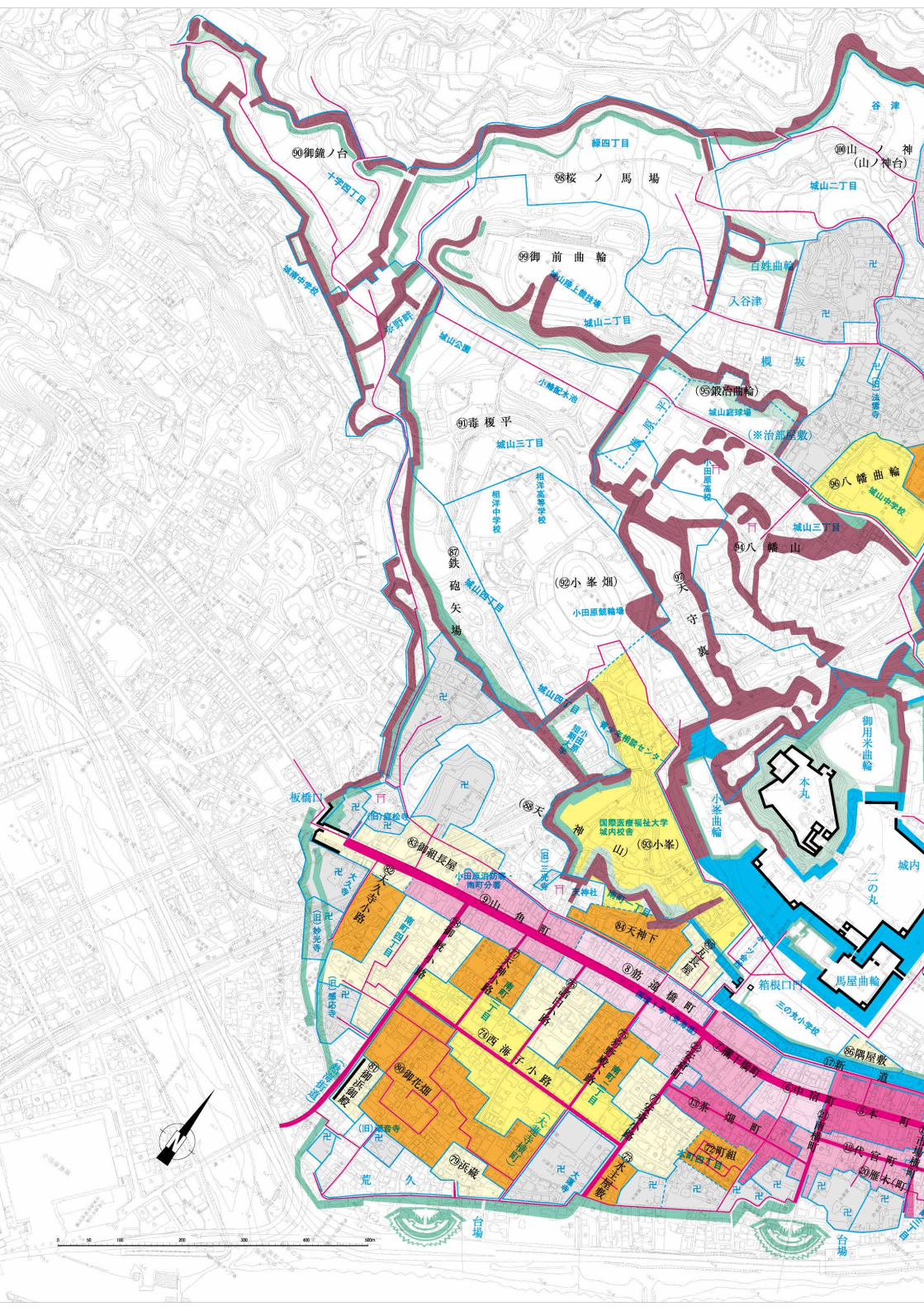
「小田原の町の外側には門と番所があり、町の両側には美しい建物が並んでいる。町筋は清潔で、糸のようにまっすぐ延びており、中でも中央の通りは非常に道幅が広い。郭外の町並みを合わせると、半時間では通り抜けることはできない。家屋はおおよそ千戸、小さいけれども小ぎれいで大部分は白壁であった。また、家屋は四角い土地に、小さな庭園を備え付けている。」

ケンペルの目には、清潔な街路と礼儀正しく品の良い服装の小田原の人々が好意的に映っていたようです。また、「町筋は清潔で、糸のようにまっすぐ延びており」との指摘は、前章で触れた戦国時代以来の町割が残る場所の表現として、『明叔録』にも通じるものです。

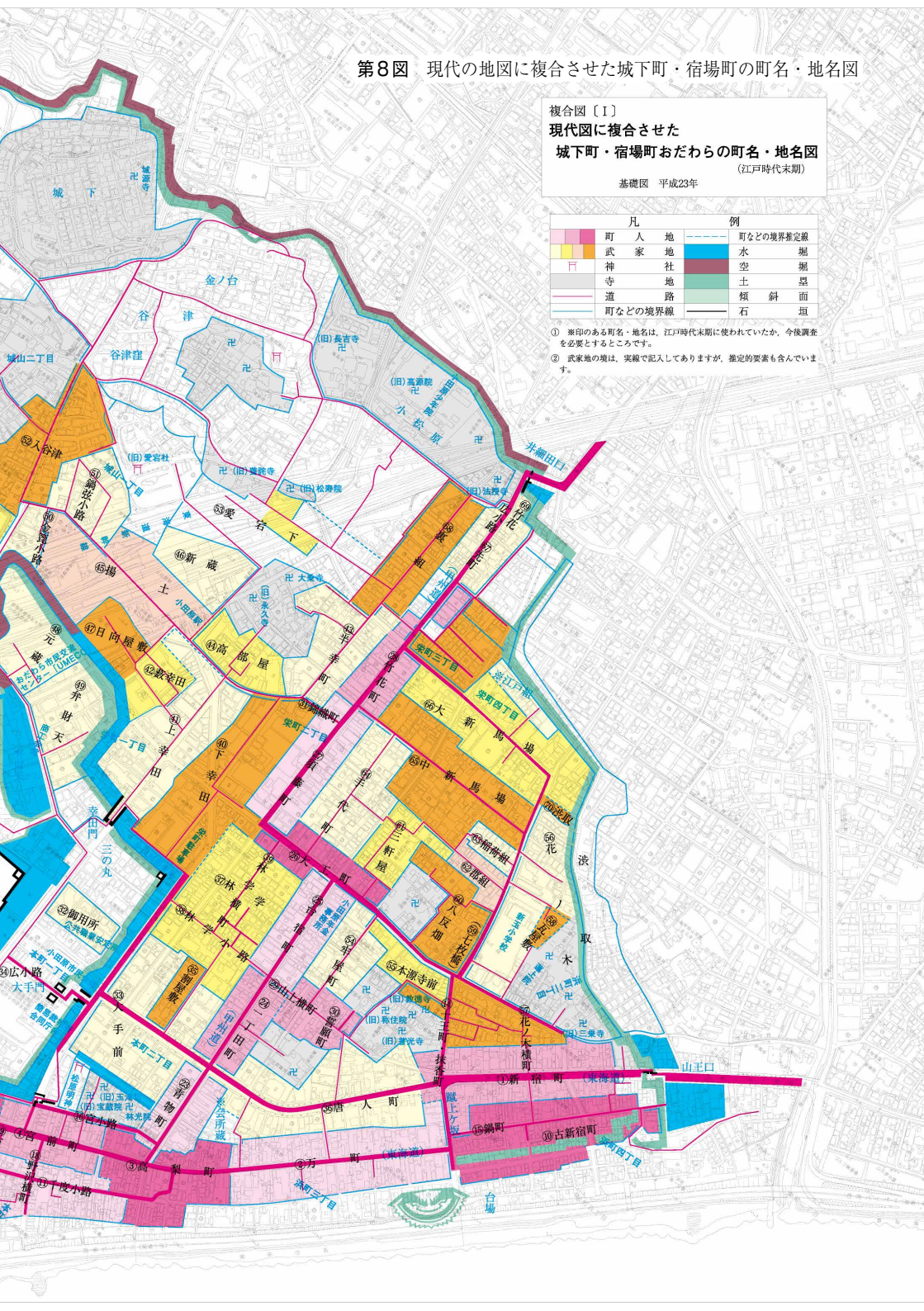
小田原の町では、戦国時代以来、板橋で早川の水を取水した「小田原用水（早川上水）」が使われていました。『新編相模国風土記稿』によると、須藤町・竹花町では用水が及ばないために井戸があるとされていますが、それ以外では「小田原用水（早川上水）」の水が飲用水として用いられているとあります。



写真16 筋違橋町遺跡第Ⅴ地点の木樋や竹樋



第8図 現代の地図に複合させた城下町・宿場町おだわらの町名・地名図



実際には、井戸も各所で見つかつてはいますが、筋違橋町遺跡第Ⅴ地点では、上水関連の施設と考えられる木樋や竹樋の埋設された溝が見つかっています（写真16）。

表紙の写真を見ると、小田原用水が暗渠として東海道を通っている様子が確認できます。左手の大八車を引く2人の方がその場所です。欄干橋町遺跡第Ⅳ地点や筋違橋町遺跡第Ⅲ地点で町屋の上水に関連すると考えられる施設の一部が見つかっています。東海道側より水を引き、写真16に見られるように木樋・竹樋を利用して屋敷内に引水していたのではないのでしょうか。

2 ゴミが語る江戸時代のくらし

屋敷の裏手には、大きな土坑＝ゴミ穴が掘られていることがあります。江戸時代には生ゴミも資源ゴミも埋め立てて処分するのが一般的でした。そのため、ゴミ穴からは動物や魚の骨などの食べかす、割れた陶磁器などの生活の道具が出土します（写真17～20）。

江戸時代になると「やきもの」のバリエーションが増え、用途により様々な器種が使われるようになります。中には、土人形と呼んでいる「やきもの」のミニチュア製



写真17 欄干橋町遺跡第Ⅵ地点のゴミ穴で出土した様々な生活道具

品、玩具も出土しています。土人形は、呪い具などとしては戦国時代にも見られましたが、江戸時代になると玩具としての要素も目立つようになります。

土人形には、小さな碗や徳利、ニワトリなどの動物、天神様や土鈴など様々なものがあります。四角いいちぶはんきん一分判金を模したものもあり、江戸時代の小田原の町でおまごとして遊ぶ子供たちの笑い声が聞こえてくるようです。

そして、戦国時代までは日本では磁器は生産できず、中国大陸・朝鮮半島からの輸入品が用いられていました。しかし、豊臣秀吉の朝鮮出兵に際し、大陸より陶工が日本に連れてこられたことにより、新しい技術による磁器生産が可能となりました。肥前国（現在の佐賀県）の伊万里や波佐見などの窯を中心に生産された磁器は、江戸や大坂などをはじめ、広く日本全国に流通しました。小田原にも江戸を経由して多くの磁器がもたらされ、利用頻度が高まりました。

大量に生産された陶磁器は、量産品として同じ器形・同じ図柄のものが生産されました。そのため、各地で同じ陶磁器が出土することから、比較検証が行えるようになりました。また、江戸時代になると識字率の向上などにより、火事や地震・噴火などの災害が文字として記録されます。記録が残ることで、災害の絶対年代が把握できるようになり、生産地における窯の調査成果も加わって、より細かく陶磁



写真18 中宿町遺跡の土製品



写真19 18世紀の肥前産磁器、瀬戸美濃産陶器



写真20 19世紀の肥前産・瀬戸美濃産磁器



写真21 ^{きせる}煙管

器の生産・廃棄年代が把握できるようになりました。

発掘調査をしていると、「小判は出ますか?」とよく聞かれますが、小田原城下での小判の出土例はありません。しかし、これまでに4点の一分判金が見つっています(裏表紙)。一分金は4枚で1両ですので、ちょうど小判1枚分が出土していると言えます。

金属製品として^{きせる}煙管なども出土しています(写真21)。多くの煙管は、竹製の羅字を挟み、口につけて煙を吸い込む「吸口」とたばこの葉を入れて火をつける部分の「雁首」^{がんくび}とからなります。発掘調査で出土するのは、「吸口」と「雁首」で、銅や真鍮(銅と亜鉛の合金)で作られたものがあります。その他の金属製品として、欄干橋町遺跡第XⅧ地点では錠前が多量に出土していますが(写真22)、これは特殊な事例といえるでしょう。



写真22 錠前



写真23 下駄

さらに、箸や下駄、漆器などの木製品も見つかっています（写真23）。特に、下駄は様々な形のものが出土しています。しかし、両足分が揃って出土したことはないため、なんらかの理由で廃棄されたものだと考えられます。

3 小田原宿と飯盛女

小田原は箱根の山越えを控え、宿泊する旅人の多い場所でした。小田原宿には公用人や参勤交代の大名のための本陣・脇本陣が多く、それぞれ4軒ずつ置かれていました。一般旅行者のための旅籠屋^{はたご}もあり、本町を中心とする「通り町」には80～90軒ほどが営業していたようです。食事が提供される旅籠屋以外にも、素泊まり専門の木賃宿も多数存在しました。

また、町人地には宿泊逗留者や旅行者に合わせて土産物屋、食堂、雑貨屋、呉服屋、魚屋などの商家も並び、小田原宿は活気に満ちていました。古典落語「抜け雀」は小田原を舞台としており、行き交う往来の賑わいが伝わってきます。

小田原宿では、宿泊客を増やし、宿場を活性化させるために飯盛女を設置しました。飯盛女とは、旅人を給仕・接待する女性であり、飯盛女のいる宿は繁栄し、不在の宿は廃れるとも言われていました。しかし、風紀が乱れるとの理由で基本的には幕府や藩により禁止されていました。小田原宿でも長い間禁止され、文化3年（1806）に限定的に許可されるにとどまっていた。しかし文化14年（1817）に大火で小田原宿



写真24 欄干橋町遺跡第Ⅴ地点で出土した箸



第9図 『東海道中膝栗毛』より（神奈川県立歴史博物館蔵）

の80%が灰となり、翌々年の文政2年（1819）の大火で残る山角町の100軒以上の町屋が焼失しました。これにより、小田原宿は急激に衰退し、復旧は困難な状況となりました。そのため、宿場の復興と活性化のため、飯盛女の設置が許されました。

そのような飯盛女が存在を示唆する資料が、発掘調査でも見つかっています。欄干橋町遺跡第Ⅴ地点は、天保3年（1833）以降「竹本屋幸右衛門」の旅籠屋だった場所です。ここでは、ガラス製の簪・筭の破片が77点出土しています（写真24）。出土した簪は、白・青・緑・透明色のガラスを組み合わせ多彩なデザインに仕上げられており、「竹本屋」で働く飯盛女が身に着けていたと考えられます。

なお、竹本屋幸右衛門は、二宮尊徳による報徳仕法を実践し、「小田原報徳社」発足の世話人を務めた人物として知られています。

十返舎一九の滑稽本として有名な『東海道中膝栗毛』にも、小田原宿では飯盛女と思われる「まんざらでもねへ」と言われた器量良しの女中さんが登場します。第9図の浮世絵は、五右衛門風呂の入りを知らない弥次さん・喜多さんのふたりが、窯底の熱さで七転八倒している場面です。

遺跡からは、筭のほかにも化粧道具である紅皿なども出土しており、女性たちの存在を示す道具の出土は、小田原宿の賑わいを鮮やかに伝えてくれます。

欄干橋町遺跡第Ⅴ地点の場所には、「竹本屋」以前には「中村屋源兵衛」の旅籠があったことが文献史料から確認できます。発掘調査では中村屋の屋号紋である「八中」が墨書された火消し壺や、釘書きが刻まれた瀬戸・美濃産の灰釉徳利かいゆうとっくりが見つかっています（写真25）。このような徳利は「通い徳利」と呼ばれ、酒屋が小売り用の容器として貸し出したものです。釘書きは、店と客の間を行き来する際に、どこの客のものかがわかるように目印としたものです。これらの出土により、この場所が中村屋であったことを確認することができます。



写真25 通い徳利と釘書

4 江戸時代のリサイクル

通い徳利の他にも、文字が記された陶磁器が出土します。それは、割れた部分を修理した痕跡が残る陶磁器に見られ、そのような陶磁器の底（高台の中）を見ると、朱色の文字が書かれています。

これは「焼継やきつぎ」と呼ばれる江戸時代後期に広まった割れた陶磁器を補修する方法の一つの痕跡です。同じ陶磁器を何度も修理しているものも確認されるため、江戸時代の人達が陶磁器を大切に使用していたことがわかります。焼継は、焼継師と呼ばれる職人により行われましたが、焼継師は修復する品物を預かると、預かり先を目印として朱書きで記していました。文字は所在地と名前の組み合わせになっているものが多く、記された文字を分析し、絵図などの文献史料と合わせることで持ち主や当時の町割りを知ることができます。

たとえば、欄干橋町遺跡第Ⅹ地点では、「らん 川西や」「小松や」といった朱書き文字資料が128点出土しています（写真26）。調査した場所を19世紀の屋敷割の図と照合してみると、「川西屋」と「小松屋」が並んでいた場所であることがわかります。「川西屋」と「小松屋」の敷地境がどの辺りなのかは、屋敷図だけで判断するのは困難ですが、朱書きの文字資料が出土した場所を平面的に押さえることで、屋敷の境を検討することができます。

焼継資料は、明治時代に入ってから製の製品にも見られるため、明治時代になっても行われていたようです。焼継資料は市内千代でも出土しており、焼継師は城下町・宿場町だけでなく、近郊にも出向いていたのでしょう。

茶の
めしや
惣兵衛



ら
つるや



らん
金三郎



らん
源



ら
かめ



ト
丸長門



写真26 欄干橋町遺跡第X地点の朱書き資料

IV そして近代へ

1 近代交通網の発展と別邸文化

江戸時代より続いた宿駅制度が廃止されると、旅行客の減少などにより宿場町として栄えた小田原は活気を失っていきます。

そこで、再び小田原の町に活気を取り戻そうと、小田原の有力者たちは温泉場として名を馳せていた箱根に逗留していた皇族や伊藤博文ら明治政府の高官や実業家の渋沢栄一らの知遇を得て、活路を見出そうとしていました。伊藤博文の別邸滄浪閣が建設され、南町周辺には旅館が相次いで開業し、政財界人による別邸建設が行われました。

明治26年（1893）、避寒のために伊藤博文別邸滄浪閣に滞在していた明治天皇の第6皇女^{つねのみやまさ}常宮昌子内親王と第7皇女^{かねのみやふさ}周宮房子内親王が小田原を気に入られたことから、明治33年（1900）に旧城内に御用邸の建設が行われました（写真28）。小田原御用邸は、沼津・葉山・箱根の御用邸に訪れることの多かった皇族の途中の滞在地としても使用されました。皇室関係者と

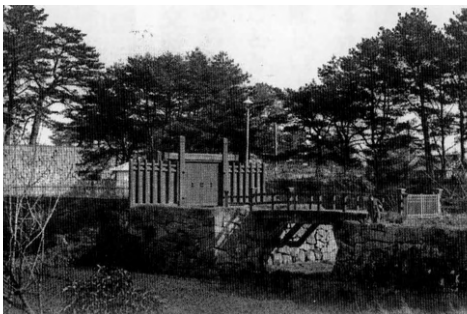


写真28 御用邸西御門（個人蔵）



写真27 山縣有朋の別邸「皆春荘」

小田原地方との人的交流が盛んになると、小田原の別邸地としての評判はさらに高まり、日露戦争後には益田孝や山縣有朋の別邸などもつくられました。「皆春荘」など現存している建造物の一部を観覧することができます（写真27）。

これらの別邸が小田原に数多く建設され

ることとなった背景には、鉄道の整備により小田原が交通の要衝としてにぎわったことがあげられます。日本初の鉄道は、新橋―横浜間を往復するものでしたが、一定の料金を支払えば、身分に関係なく自由に乗車できることから、新しい時代の幕開けを感じさせるものでした。

明治20年（1889）に横浜―国府津間を結ぶ東海道線が開通すると、国府津は小田原・箱根方面への人力車・馬車の乗り換え地点となり、翌年には国府津―湯本間を結ぶ小田原馬車鉄道が開通しました。明治29年（1896）には客車を車夫が押して進む人車鉄道が小田原―熱海間を結び、国木田独歩の随筆『湯ヶ原ゆき』や芥川龍之介の小説『トロッコ』に登場します。

大正9年（1920）10月に東京方面への直通列車が運行されるようになり、小田原駅が開業しました（写真29）。

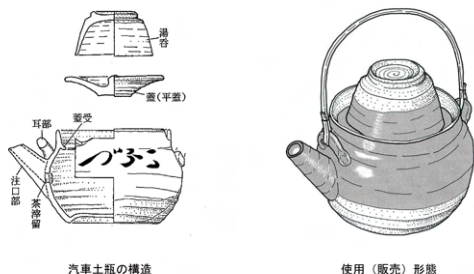
近代の交通網が整備されていく様子を示す考古資料の一つとして、乗客が駅弁とともに購入した汽車土瓶という陶器製の容器があります（写真30・第10図）。小さな土瓶と湯飲みがセットになっていて、汽車土瓶には販売された駅名や弁当屋の店名が記



写真29 小田原駅（小田原市立中央図書館蔵）



写真30 小田原駅構内の調査で出土した汽車土瓶



第10図 汽車土瓶の構造と使用（販売）形態
（国見1999より転載）



写真31 ポイ捨ての注意喚起ラベル

時代	明治				大正		昭和		昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和				昭和			
----	----	--	--	--	----	--	----	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--	----	--	--	--

第11図 汽車土瓶史年表

されることがあります。これまで「横浜」、「大船（船）」、「こふづ（国府津）」などの地名が記されたものが市内で見つかっています（写真30）。

鉄道敷設以前の移動手段は徒歩を基本としていましたが、鉄道では座って過ごすことができるようになり、旅の移動中に食事をする習慣が生まれました。そして、駅構内での駅売弁当（通称、駅弁）の販売が明治10年代に開始されると、食事とともに飲み物が欲しくなる乗客に向け、注文後に熱湯を土瓶にいれて提供する形態でお茶が販売されるようになります。土瓶は旅を終え、用済みになると駅のホームや車内に放置されたようです（写真31）。これらのゴミは車内清掃時に収集され、まとめて廃棄されたとみられます。小田原駅構内の小田原城下日向屋敷跡の確認調査でも、多量の汽車土瓶がまとまって出土しています。

ちなみに、国府津駅における茶の販売を示す最古の史料である『停車場内営業命令書』（明治28（1895）年2月20日付）には、「一 弁当鮎及茶、一 洋酒類、一 菓子類、一 果実類」と記されており、駅弁とお茶以外の物品も乗客へ販売を行っていたことがうかがえます。

汽車土瓶は、信楽・瀬戸・美濃・常滑・益子など焼き物の産地で焼かれ、専用の容器として生産されましたが、初期の頃は従来の土瓶を小型化して商品としていました。

しかし大正11年（1922）7月に陶器の汽車土瓶が不衛生であるとの指摘から、あらかじめ容れた茶をガラス瓶で提供することが義務付けられることになりました。注文後に熱湯を注いで提供されたお茶と比較するとぬるく、ガラスから透ける色も悪いことから乗客からは不評だったようです。その後、昭和天皇の即位に際して記念の汽車土瓶が製作され、1930年代には陶器製の汽車土瓶が復活し、ポリ容器が普及する1960年代半ば頃まで電車による旅のお供としての役目を担っていました。

汽車土瓶の出土が示すような鉄道利用の増加により、小田原の町なみは大きく変化し、再び活気を取り戻しました。

2 度重なる自然災害を受ける小田原

前章までにご紹介したように、戦国大名北条氏が整備した小田原の町なみは、寛永10年（1633）の寛永小田原大地震により大きな被害を受けてしまいます。震災復興は、幕府の援助を得て急ピッチに行われ、小田原城も石垣・白壁・瓦葺の城郭へ改修されました。この時には、城下町も身分・職業による住み分けが行われ、近世城下町の姿が整えられました。

しかし近世城下町の姿が整えられて以降、小田原は元禄地震（1703）、天明地震（1782）など度重なる自然災害の影響を受けてきました（第12図）。

また、宝永4年（1707）の富士山噴火による大規模な火山灰降下は小田原藩領内にも多大な被害をもたらしました。降灰による耕作不能地が増大したほか、火山灰を酒匂川に廃棄処分したことに伴い、豪雨のたびに氾濫を繰り返し、被害をもたらしました。



写真32 倒壊した店舗（小田原市立中央図書館蔵）



写真33 発掘調査で見つかる関東大震災の焼土

	神奈川県に被害を及ぼした主な地震	富士山噴火
(西暦)		
800	818年 7月 (弘仁9) 相模、武蔵、下総、常陸、上野、下野などで被害。圧死者多数。 878年 9月29日 (元慶2) 相模、武蔵を中心に被害。圧死者多数。	781年 延暦噴火 800年 貞観噴火 864年 貞観噴火 937年 999年 1033年 1083年
1000		
1200	1220年 1月12日 (承久2) 「鎌倉地震」。 1227年 3月 1日 (安貞1) 「鎌倉大地震」。所々の門扉・築地等崩れる。 1257年10月 9日 (正嘉1) 「正嘉の大地震」。鎌倉で山崩れ、社寺・家屋倒壊などの被害。 1293年 5月27日 (永仁1) 「永仁の大地震」。鎌倉で社寺・家屋倒壊、焼失などの被害。	
1400	1433年 9月16日 (永享5) 「永享の大地震」。関東で大地震。大山の仁王の頸落ちる。 1495年 8月15日 (明応4) 「鎌倉大地震」。津波で大仏殿が壊れる。 1498年 9月20日 (明応7) 鎌倉で津波により、溺死者200人。	1435年 1511年
1600	1604年12月 6日 (慶長9) 小田原に被害。 1614年 1月22日 (慶長19) 「寛永小田原地震」。小田原市内で死者150人、家屋全壊多数。 1633年 3月 1日 (寛永10) 小田原城の廻り破損。 1645年 9月15日 (正保2) 小田原城内の石垣など崩れる。 1647年 5月14日 (正保4) 小田原城内の石垣など崩れる。 1648年 4月22日 (慶安1) 川崎で民家140～150軒などが倒壊。 1649年 9月 1日 (慶安2) 「南関東駿豆地震」。小田原城の石垣が崩れ、天守等が類焼。 1703年12月31日 (元禄16) 宝永地震、被害を受ける。 1707年 7月15日 (宝永4) 箱根、小田原で被害が大きく、小田原城天守閣が傾き、石垣が崩れる。	1707年 宝永噴火
1800	1782年 8月23日 (天明2) 横浜で、家屋全壊22棟。付近でも死者、家屋全壊あり。 1812年12月 7日 (文化9) 「天保地震」。 1843年 2月 9日 (天保14) 「嘉永大地震」。小田原城天守閣大破、城下の武家屋敷など全半壊。 1853年 3月11日 (嘉永6) 「安政東海地震」。 1854年11月 4日 (安政1) 「安政江戸地震」。 1855年11月11日 (安政2) 県東部を中心に被害。 1894年 6月20日 (明治27) 「関東大震災」。小田原城の天守台、本丸、二の丸の石垣が崩落。 1923年 9月 1日 (大正12)	

第12図 歴史時代以降の記録に残る主な地震と富士山噴火

近代以降も、明治35年（1902）9月28日に発生した小田原大海嘯は、小田原だけで死者11名、負傷者184人、建物全壊144戸、半壊69戸、消失建物293戸、床上浸水300戸、床下浸水700戸に及ぶ甚大な被害を及ぼしました。

また、大正12年（1923）の関東大震災でも未曾有の被害を受け（写真32）、地面は90cm以上も割れ、約180cmも埋没して崖のようになったところもあったようです。地震後に発生した火事によって全焼した家屋は2126軒に及び、発掘調査を行うと明確な焼土の面として捉えることができます（写真33）。

このように、小田原は度重なる地震や自然災害により、甚大な被害を繰り返し受けてきました。しかし、その度に人々は町を再興し、小田原の町に賑わいを取り戻してきました。

発掘調査では、このような災害の歴史も知ることができます。現代に生きる私たちは、被災と復興に努めてきた人々の活動を知ること、未来の防災に役立てていく必要があります。

		和暦	西暦	事項
中 世	北条時代	14世紀		はじめて「をたはら（小田原）」の地名が登場する
		文亀元年	1501まで	伊勢宗瑞が小田原城を支配下におく
		永正15年	1518	氏綱が早雲より家督を継ぐ
		大永3年	1523	氏綱、伊勢から北条に改姓する
		天文10年	1541	氏綱没し、氏康が家督を継ぐ
		永禄2年	1559	氏政が家督を継ぐ
		天正8年	1580	氏直が家督を継ぐ
	前期 大久保時代	天正18年	1590	小田原合戦 北条氏が豊臣秀吉に小田原城を明け渡す 氏政と弟の氏照、自刃、氏直は高野山へ追放となる 大久保忠世が小田原城主となる
		天正19年	1591	氏直、赦免される。一万石を与えられ、秀吉に出仕するも病没する
		文禄3年	1594	大久保忠隣が城主となる
		慶長5年	1600	関ヶ原の戦い
		慶長8年	1603	徳川家康、征夷大將軍となる（江戸幕府の成立）
	番 城	慶長19年	1614	忠隣が改易され、小田原城は幕府管轄の番城となる
		慶長20年	1615	豊臣氏が滅亡する（大坂夏の陣）
	阿部	元和5年	1619	阿部正次が藩主となる
	番 城	元和9年	1623	再び番城となる 小田原城を二代將軍徳川秀忠の隠居城とする計画が立てられる
		寛永9年	1632	稲葉正勝が藩主となる
	稲 葉 時	寛永10年	1633	小田原城の修築が始まる 寛永小田原大地震により修築中の城と城下に大きな被害がでる
		延宝3年	1675	小田原城の修築が完了する
	戸 時 代	貞享3年	1686	大久保忠朝が藩主となる
		元禄16年	1703	元禄小田原地震により小田原城は天守を含むほとんどの施設が倒壊・消失する
		宝永3年	1706	小田原城天守が再建される
		宝永4年	1707	富士山が噴火（宝永噴火）
		宝永5年	1708	前年の富士山噴火の被災地が幕領となる
		享保元年	1716	享保の改革が始まる
		延享4年	1747	幕領となっていた村々の大半が小田原藩に復帰する
		天明7年	1787	寛政の改革が始まる
		文化3年	1806	飯盛女設置
		文化14年	1817	大火で小田原宿の80%が灰になる
		文政2年	1819	大火で町屋が焼失
		天保12年	1841	天保の改革が始まる
		嘉永5年	1852	小田原の海岸に3台場が完成する
		嘉永6年	1853	ペリーが浦賀に来航する
		慶応4年／明治元年		戊辰戦争が始まり、明治新政府が成立する
明 治		明治3年	1870	小田原城の天守・櫓などが売却され、解体される
		明治4年	1871	廃藩置県により小田原藩が廃止され、小田原県が設置される
		明治23年	1890	小田原城跡が陸軍省より元藩主大久保氏に払い下げになる
		明治29年	1896	人車鉄道が小田原―熱海館を結ぶ
		明治34年	1901	小田原城内に御用邸が落成する
大 正		明治35年	1902	小田原大海嘯
		大正9年	1920	東海道線小田原駅開業
		大正12年	1923	関東大震災 天守台、本丸、二の丸の石垣が崩落

第13図 本書に関連する中世・近世・近代の歴史関連年表

文 献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。小田原城とその城下の街道沿いの暮らしについてさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

窯業史博物館	1995	『汽車土瓶：変わりゆく旅の器たち』 第一回企画展
國見徹	1999	「鞆旅の什器」『都市・近郊の信仰と遊山・観光』 地方紙研究協議会 編 雄山閣
宇佐美ミサ子	2000	『宿場と飯盛女』 同成社
宇佐美ミサ子	2005	『宿場の日本史―街道に生きる』 歴史文化ライブラリー198 吉川弘 文館
福田敏一	2004	『新橋駅発掘―考古学からみた近代―』 雄山閣
小田原城天守閣	2014	『いにしえの小田原～遺跡から見た東西文化の交流～』 小田原 城天守閣特別展図録
小田原城天守閣	2018	『小田原開府五百年～北条氏綱から続くあゆみ～』 小田原城天守閣特 別展図録
佐々木健策	2019a	『戦国・江戸時代を支えた石 小田原の石切と生産遺跡』 シリーズ 「遺跡を学ぶ」132新泉社
佐々木健策	2019b	「中世・近世の拠点「小田原」」『拠点にみる相武の地域史―鎌倉・小 田原・横浜―』 地方史研究協議会第69回（神奈川）大会成果論集 雄山閣
浅野春樹	2020	『中世考古くやきもの>ガイドブック』 新泉社

小田原の遺跡探訪シリーズ18
小田原城とその城下
―街道沿いの暮らし―

令和5年（2023）2月15日 印刷
令和5年（2023）2月24日 発行

編 集 小田原市教育委員会
発 行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地
電 話 0465-33-1715
URL : <https://www.city.odawara.kanagawa.jp>
E-mail : bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp
印 刷 有限会社 石橋印刷

